

## 新座の勝手書き ——ムクドリからカラスへ——

飯 島 周

この三月末で定年となり、退職することになった。新座に通い始めてから三十三年経つ。長いとも短いとも感じられる年月である。

もちろん、この年月の間には、さまざまな出来事があった。積もる思い出は数え切れないし、それについて書けば際限もない。けれども、別れの言葉は短い方が効果的である。Girls, be ambitious!とでも言い捨てて姿を消すのが、何となく格好よさそうに思われる。一方、編集者の希望では、もう少し長いものを、三十三年來のうらみつらみを書いて欲しい、ということらしい。だが、うらみ・つらみを巧みに表現するには特別な才能が必要である。その才能に欠ける人間には、せいぜいいみやぐらいしか書けないだろうし、もはや恩讐の彼方に去るべき立場でもあるから、それは諦めて貰い、心に浮かぶよしなしごとの幾つかを、勝手気ままに書き綴って、責めを果たすことにしよう。とめどない点はお許し願いたい。

新座のキャンパスを初めて訪れたのは、今から三十五年前、昭和四十一年の春だったと記憶する。同年開設の英文学科の要員として、文部省の資格審査に合格した、その後の相談のためである。ある筋からの推薦を受けてのことだったが、当時住んでいた上福岡から近いことも好都合だった。ただし、その頃は武蔵野線は存在せず、学バスは志木駅まで通っていたが、授業時間に合わせた分だけで、一日十往復前後だったかと思う。道路の舗装も不完全で、雨の時は泥沼のようになった。校舎も、現在の本館さえ未完成で、四階までしかなく、食堂は二教室分ほどの広さで、メニューも何種類だったか、ごく少なかった。どの場合もそうだろうが、草分けの苦勞は、やがて正史の陰に埋もれ、創設者たちの汗や涙は、時の流れと共に朝露のごとく消えて行く。というわけで、跡見学園女子大学の創成期は、語り部にとっても、おほろ気になりつつある。

実際に就任して新座のキャンパスに通い始めたのは、昭和四十三年の四月からだった。

初期の学生には、跡見高校の出身者がかなり多く、学生の中核になっていた。何人かが教室の最前列に陣取り、教師が入って行くと、有名な「ごきげんよう」という挨拶で迎えてくれたものである。この習慣に対して、旧来の陋習だと批判する声もある。ただ、世界のどこでも、組織的な授業が行われる限り、使われる言葉や表現は別として、始業時と終業時の挨拶は欠かせないはずだ。挨拶が欠けることは、取りも直さず授業の崩壊に通ずる。教師と学生の精神的交流が、最初から拒否されるのだから。いずれにせよ、開学時のこの習慣はみごとに消滅し、授業時間のけじめもつかぬ状態が生じかねないのは残念である。

誤解のないようにつけ加えるが、学生諸師を一方的に非難するつもりはない。制度的な欠陥、カリキュラムの不備、教師の不勉強と無責任、社会の風潮など、いくらでも他の理由をあげることができる。ただ、どのような理由があろうとも、強く感じられるのは、もはや昔のような学校の雰囲気、学生たちの学問への憧憬、仲間意識とか愛校心を期待できそうもない、ということだ。世の中が変わった、又は学校の社会的機能が移った、と言えよう。ただちに結論は出せないが、一般的な解決策として、学校制度という枠組みの拡大又は柔軟化、いわゆるユニヴァーサル化又はボーダーレス化が必要と思われる。具体的には、希望者にはすべて学生の資格を与え、ITを最大限に活用して、物理的・心理的拘束感を減少させ、各人にそれなりの充実感を持たせることである。補足的に言えば、インターネットの使用などにより、学生が自由に時間や場所を選択して授業が受けられるようにし、就学年限や年齢も特に定めぬようにすることである。それには、当然ながら、従来の意味での「大学」とか「学生」とは異なる社会的存在を、公的に認知する必要がある。それが、二十一世紀の大問題と思われる。

話が少し固くなって来た。方向転換を計ろう。

三十年前の新座キャンパスは、名物の桜並木もまだ幼なく、グラウンドの芝生もまばらな感じだった。当時の印象に残るものの一つは、キャンパス内のあちこちで見かけたムクドリの姿である。やや臆病で、間抜けだとされるこの小鳥は、夕暮れになると大群をなし、やかましくさえずり立てる習癖がある。だが、全体的には灰褐色で、別名白頭翁、英名 starling さながらの、小さな白い星模様のある顔をしたその姿

は、何となく愛嬌があり、興味をそそった。そして、冬になるとグラウンドのあたりに、ぼつぼつとモグラの塚が盛り上がりを見せた。ムクドリとモグラ、この両者が、人間不在の折には、キャンパスを支配する生物だったような気がする。

ところが、いずれの時からか、カラスがのさばって来て、ムクドリは次第に姿を消し、現在では、ほぼ完全にカラスの天下になっている。人の世の移り変わりと同様に、鳥の世界の変遷も無視しがたい。ムクドリからカラスへ、というのが新座の歴史、さらに強引に言えば、日本の歴史の一面を象徴するかもしれない。

というわけで、これからカラスを主題に取りあげる。カラスのことなら、童謡の『七つの子』で示されるように、子供の頃からおなじみで、いろいろ書くことがある。

言うまでもなく、カラスは人間社会と最も接触の多い鳥の一つである。都会でも田舎でも、その姿を見ず、その声を聞かぬ日はない。この鳥の仲間は全世界に分布しているが、地域によって、種類が多少異なる。たとえば、有名な作家フランツ・カフカの姓は、Kafkaと綴るが、これはチェコ語の kavka、すなわちカラスの一種「コクマルガラス」に由来する。この種は、英語の jackdaw、ドイツ語の Dohle に当たるもので、ヨーロッパに生息する。そこで、日本人の観光客の多いウィーンのベルヴェデーレ宮の庭などでよく見かけるが、日本では見られない。この小型のカラス・カフカは、胴体に大きな灰色の部分があり、遠くから見るとまるでハトのようで、一般のカラスとは異なる印象を与え、その名は「お人好し」のような意味で使われることさえある。(実は、これらに関して、二、三年前に小さなエッセイを書いたことがある。「カフカとカラス」『言語』1998年8月号 大修館書店 参照。なお、日本のあるカフカ研究者が、「カフカ、すなわちカラスという名前からして不気味である」という意味の解説をどこかで書いていたが、これはいわばカラスの勘違いであろう)

日本にいるのは、ハシブトガラスとハシボソガラスの二種類だそうで、新座のカラスは前者である。銀座のカラスもおそらく同類に違いない。

ついであるが、英語でのカラス類の名称はやや複雑である。少なくとも、crow、raven、rook、jackdawの四種類がある。これらのうち、

crowとravenは、比較言語学的に関係が深い。周知のように、crowはカラス一般の総称として用いられるが、これは古英語krāweに由来する。一方ravenは、たとえばロンドン塔で飼われたり、E.A.ポーの詩に登場したりする大型のカラスを指すが、この形は古英語hræfn起源である。しかし、さらにさかのぼれば、両語ともラテン語のcorvusと関連し、サンスクリット語のkāravasに結びつく。(最終的には原インドヨーロッパ語の\*kerにまでたどり着く、と推定されている) kāravasは日本語のカラスとよく似た形だが「kāと鳴くもの」と解釈されるので、カッコウの場合と同じく、擬音的な命名と言える。この語の基本的子音構成は、ラテン語の場合と同じくK(=C)-R-Vで、それをそのまま保存しているのが現在のcrow(w=v)であり、語頭の子音が欠けてNが加わったものの、すなわちR-V-Nの形になったのがravenである。(古英語の語頭子音hが欠けた例として、よく引用されるのはhlāf→loaf「パンの塊」である。なお、英語の形容詞corvine、現在のドイツ語のKrähe、およびRabe参照)

周知のように、カラスの鳴き声は一般的に「カア、カア」とされる。国際的にそうなのだが、時には違う聞き取り方もあるらしい。たとえばチェコの作家カレル・チャペックは、童話の中で、カラスの鳴き声を「クラール、クラール(王様)」と描写している。日本でも、夏目漱石は、ある小品の中で、京都のカラスは「キャケェ・クウ」と曲折した鳴き方をする、と書いている。カラスにも方言がある、と江戸っ子の漱石は考えたのだろうか。残念ながら、新座のカラスの方言的特徴の研究はできなかった。いずれ、心ある方に後事として託したい。ただ、鳴き方に個体差があることは十分感じている。

カラスの知能程度については、かなり判断が分かれる。宮沢賢治の『カラスの北斗七星』に出てくるカラスの艦隊は、もちろん空想の世界でのことだが、E.T.シートンの動物記でも観察されているように、カラスの組織的行動能力は、鳥類の中では群を抜く。その他、日本神話で神武天皇の御東征の際に道案内役をつとめたヤタガラス(八咫鳥)の話のように、カラスの頭のよさには定評がある。現に、ある雑誌の最近号には、カラスについての専門的な記事があり、その脳の重さはニワトリの脳の三倍もあって、人や物を見分ける能力、すなわち認知能力や学習能力も非常に高いことが述べられている。しかし、別の面も

よく取り上げられ、愚かさの例として「ウ（鶉）の真似をするカラス」と言ったり、物忘れのひどいことをカラスにたとえたりするから、頭の悪いカラスもいるのだろう。

カラスの倫理性については、「カラスに反哺の孝あり」とかで、高く評価する場合もあれば、「盗癖あり」「口汚い」とする意見もある。「タカ派、ハト派」という鳥類学的分類が、人類にも一般的に通用しているから、「カラス派」が存在しても不思議ではないが、「あの人はカラス派だ」という隠喩的表現は、いかに解釈すべきか人を惑わせる点で効果的である。

カラスについては、実に多くの諺があるが羽根の色に関するものが目立つ。英語の例を二つ挙げておく。

The crow thinks her own birds whitest (又は fairest). 「カラスは自分の子が一番白い (又は美しい) と考える」

A crow is never the whiter for washing herself often. 「カラスは何回体を洗っても、もっと白くはならない」

それで思い出すのは、小学生の頃、家でおぼえた「藤村カルタ」という変わったカルタの中の文句である。このカルタは、作家の島崎藤村が多少教訓的な目的で作ったものだとということで、「イロハカルタ」の一種だが、いわゆる「犬棒カルタ」とは異なる文句が所々に選ばれていた。たとえば「㊟ 論より証拠」の代りに「㊟ 櫓は深い水 棹は浅い水」とか、「㊟ 竹のことは竹に習え」というような臨機応変を説く言葉が多かった。それらの中に、「㊟ かしこいカラスは黒く化粧する」というのがあったのだ。この読みの、カ行の頭韻を重ねた響きは、子供心にも深く刻みつけられた。それに取り札の絵は、たしか岡本一平の筆で、㊟の札一面に大きく描かれた化粧中の黒いカラスの姿が、今でも目に浮かぶ。

目に浮かぶのは、もちろんカラスだけではない。就任以来今日まで、このキャンパスで出会い、共に学び共に苦勞した多くの学生や同僚の面影も、忘れ得ないものである。そして現在、学内を横行する、黒く化粧したかしこい (あるいはかしこくない) カラスの群に接して、三十年前の、おどおどとつつましく並木の陰を小走りしていた、あのム

クドリたちを懐かしく思うのは、「追憶は美化される」という人間性の一般法則に毒された者の感傷だろうか。

ともあれ、三十年前には予想もできなかった、この新座キャンパスの新館七階の高みから、遠く煙る新宿副都心の超高層ビル街を望み、間もなく開設予定の新学部棟の建設工事を目のあたりにして、跡見学園女子大学が大きく発展したこと、しつつあることを実感し、さらなる躍進を願うこと切なるものがある。

最後になったが、在任中お世話になった皆さんに、心から感謝しながら筆を擱く。